

ラオスのこども通信 24号

2002年4月発行



絵本のよみきかせをする
シータン先生



子どもたちでにぎわう「家庭文庫」



<ラオス便り>

シータン先生の家庭文庫

赤井朱子

「さあ、今日はどんなお話がいいかな？」にこにこしながらやってきたおじさんが、雑貨屋かと思った小さな部屋の窓を大きく開けると、そこには本が並べられていた。

2年前、自宅の一部を開放し、ラオスでは画期的な「家庭文庫」を開いたシータンさんは、近くのケオクー小学校の先生。文庫を開いたきっかけは、会の現地スタッフから、日本の文庫活動の様子を聞いたことだった。

「村の小学校にも図書室があるけど、貧しい家庭では、大人も子どもも夕方暗くなるまで、生活のために働かなくてはならないから、なかなか行けない。だけど、夜ならば時間がとれる！」

と思い、自宅の1階に手づくりの図書室をつくってしまった。毎晩、70人もの利用者がある大盛況ぶりで、「今は自宅を अच्छにうつしてしまったよ」と先生は笑いながら隣の家を指差した。

シータン先生は、中学卒業後3年間教員養成学校

で勉強し、1982年に教員になってから、ずっとケオクー村の小学校で教えてきた。先生の図書との出会いは、91年にユニセフの支援で学校へ「図書箱」が来たことに始まる。図書箱の管理担当者となり活動。そのうちに会が本を出版していると聞き付けると、補充図書が欲しいと何度も連絡してくるようになった。96年には、学校側に理解を求め、空き教室を図書室としてしまった。村人に呼びかけ、壁の補修や本棚の作成を協力してもらった。

生活に余裕があるわけでもない小学校の教員生活。その熱意はどこから来るのか聞いてみた。

「本が学校に来る前は、小学校を卒業しても、文字がよく読めない子どもが多かった。しかし、本を読むようになって、文字がよく読めるようになって、さらに楽しそうに学校に来るようになった。子どもたちが喜んで、お話を聞いたり、読んだり、つくったりする様子を見ると、私も嬉しくなって、もっと活動したくなるんだ。」

■考え話し合うセミナー

今回の参加者は、すでに紙芝居づくりを経験しており、普及活動を実践している人ばかりです。事前に要請してあったとおり、参加者たちは各自の新作を持参していました。全員が「聞きたいこと」をたくさん抱え、日本からの専門家を待ち構えていたのです。順番に作品を発表してもらいながら、課題を出し合ってもらう形式で進めました。

課題が見えてきたとき、やべさん、堀田さんはすぐに「答え」をいいません。まず「みなさんはどう思いますか？」と尋ねます。参加者たちも自分の経験をもとに積極的に発言。様々な意見を聞くことで、課題を持った人もさらに自分の考えを深めました。専門家のお二人は、浮かび上がった課題に合わせて、参考になるような日本の紙芝居を紹介し、参加者たちが自分で考えるように進めました。

■民話と紙芝居

民話を題材に紙芝居をつくってきた人がいました。小学校の先生で、まだ、あまり作品を作ったことがなかったのですが、熱意で特別参加しました。彼の作品をきっかけに活発な議論が交わされました。

「死ぬ場面は、見ている子どもたちが、悲しくなるので、やめた方がよいのでは？」という意見が出されると、「物語の内容を変えてよいのか?」「もともと口承で伝わっているものだから、変化するのはやむを得ない」「死んだ絵を描かなければよいのでは?」「昔は死ぬと言って脅かしていたが、今はそこまでなくても、罰を与える程度でもよいと思う」「どのような話を紙芝居にするか、よく検討してから選ぶ必要がある」などなど。

二人の専門家からは、「長いものは続き物にすることもできる」「民話は常に極端に描かれ、中途半端はない」「極端にすることで、真実が感じやすい」「お話の中の世界を想像することで自分の生き方を考えられる。人は1回しか死ねないが、お話の中では何度でも死ねる」などといった、ヒントが与えられました。



紙芝居の多様な表現について話すやべさん(右)と熱心に聞く参加者たち



ラオスの民話を題材にした紙芝居を作った期待の新人ジュリーさんにアドバイスするやべさん(右から2人目)と堀田さん(中央)

■ラオスに根付く「ラコンチア」

この他「学校教材・テーマのはっきりしたもの・民話・表紙の効果・著作権・山場・主人公・単色・様々な素材での表現・演じ手の表現」など話題は多岐にわたり、6日間は瞬間に過ぎていきました。セミナーは、やべさんと堀田さんからのこんなメッセージで閉会しました。

「7年前種をまいた「ラコンチア=紙芝居」が、今ラオスに根を張りつつあるのを実感しました。何より、どこかの真似ではなく、自分たちで出来ることを、自ら考え実行されているのが素晴らしいと思います。将来、ラオスから素晴らしい作品が世界に発信されると確信しています。皆さんがラオスの紙芝居リーダーです」

なお、今回のセミナー開催及び専門家派遣にあたっては、住友財団および京都学園大学からの支援を受けています。

教師の卵を読書推進の担い手に

近藤知子

読書推進運動の担い手を増やし、運動のすそ野を広げるため、昨年5月より実施されている教員養成学校での読書推進セミナー。昨年12月4～7日 ヴィエンチャン県バンクン教員養成学校での読書推進セミナーに同行しました。

■セミナーの受講者と内容

ラオスの教員養成学校は、小学校教員養成課程と、中学高等学校教員養成課程の2つの課程に分かれています。読書推進セミナーは、これらの卒業年次の学生全員、教員養成学校の先生、司書を対象に実施しています。

バンクン教員養成学校でのセミナーは、国際開発救援財団の助成を受けて実施しました。学生約450名、養成学校の教員・司書合計約80名、合計約530名が受講し、講師のラオス事務所スタッフと国立図書館員の計4名は、あちこちの教室を掛け持ちして忙しく走り回っていました。

カリキュラムは基本的には図書配付・フォローアップセミナーと同じく、4つのパートで構成されています。

1. 読書の意義と図書の活用についての講義
2. 図書室利用、図書補修の方法の実習
3. 読み聞かせ、紙芝居、歌など子どもを読書に惹きつける方法の実習

最終日にはグループ毎に発表を行いました。

4. 近くの学校での実習

■熱心な学生たち

受講者たちは積極的で好奇心も強く、セミナーは和やかで熱気にあふれた雰囲気で行われ、質問が続出。急遽、夜間に補習時間を設けて(殆どの学生は校内で寮生活をしているので、夜間の授業も可能)質問に答えるほどでした。

学生達にセミナーの感想を聞くと、口々に「楽しい」「具体的で役に立つ」「今までにない形式で新鮮」と、好評でした。

■学生自身のことばで語る読書推進

クラス毎の発表内容の中には、読書推進をテーマにしたオリジナル劇もありました。ある作品は、学校時

代に勉強もしなかった不良少年グループのひとりがある少女に思いを寄せます。ある日その少女から手紙がきますが、文字を読めない彼らは手紙を横にしたり、逆さにしたり……。ついに町の長老に助けを求めます。内容は交際OKで、少年達は狂喜してめでたしめでたし、文字が読めなくてはナンパもできない(幕)、という話で、迫真の(?)演技で楽しめました。このように学生たちが自分自身で考え、自分たちの言葉で読書の意義を表現するしかけを作ることはよいアイデアだと思います。

■今後の課題

改善の余地もいくつかあります。例えば、先生としての経験がない彼らは、読書が子どもの成長にかなる効果をもたらすかを理解するのに苦勞しているようでした。この点はもう少し詳しい説明が必要だと思います。

全般的に、カリキュラムの完成度や運営の手順については成功であったと言えます。この成果を踏まえて、当会ではこのセミナーを教員養成学校のカリキュラムに組み込むべく、関係者と準備を進めています。読書推進を継続的に伝え、定着させる仕組みが整備されつつあります。

本の貸し出しの実習をする学生たち



カンボジアで見た自立のヒント

森 透

現在、東京事務所では様々な研修や研究会に参加し、運営能力の向上を目指しています。ASPBは、ヴィエンチャン事務所やプロジェクトの自立を目標に掲げており、1月、外務省によるNGO強化研修の一環で見て回ったカンボジアのNGOからは多くを学ぶことができました。

■組織の自立に何年待てば？

アメリカ政府の資金で途上国のNGOの自立に取り組むアメリカの団体、PACTにインタビューしました。カンボジアでは1991年から10年間、50団体を資金と運営技術で支援。打ち切った後、つぶれたのは5団体。所長はこう説明します。

「打ち切った当初は不満がいっぱい出た。しかし今は自立ができた、いい技術をくれてありがとう、と感謝されている。もし3年前にインタビューに来られたら、こういう返事はできなかった」

——打ち切ってから自立まで、何年待てばいい？

「3年は必要」

——生き残る秘訣は？

「多様な資金源をいかに確保できるか。資金づくりの技術を高めること。申請書がうまく書けることが最も重要。外国人のいる団体は、外国人が抜けると一旦は活動が落ち込むが、企画、運営、財務の能力をつければ生き残る」

では、現地NGOを設立することがラオス政府に認められていないラオスでは、どうしたらいいのでしょうか。ラオスでの経験もある所長は、「PACTとラオス政府で擬似的NGOをつくり自立に成功した。でも、そこに至るまでが大変だった」と話してくれました。

ASPBが支援する学校図書室の自立を考える上でヒントになったのが、NGOが開催した「地域で幼稚園が自立するためのセミナー」でした。

住民と幼稚園の先生が資金作りについて話し合い、水汲みポンプやバッテリーが必要となれば、NGOが5年間無利子で貸し、住民にレンタルします。このレンタル料を幼稚園の運営費にする、というのです。会計の知識の研修もプログラムに組み込むのだそうです。

ラオスで、学校図書室の本の購入費を地域で作れないかと、先生や教育委員会と話し合ったことがありましたが、アイデア倒れだったのは、実現するプログラムを持っていなかったからだと気づかされました。

■プロかアマチュアリズムか

自立に向けたASPBのもうひとつの課題は、編集者など、本づくりの人材育成です。また、人々が本におカネを出そうとしないことも悩みです。

カンボジアも同じ悩みを抱えていて、市場などで安い値段で売られています、なかなか売れません。1998年から民話を出版しているカンボジア人のグループ「白い象」は、本は買うものという考えで、学校などに売っているものの、採算がとれず、補助金なしには成り立たないのが現実とか。

彼らのもうひとつの悩みは、コピー本が出されて市場で売られていること。ラオスではコピー本が出るなんて、まだ考えられません。

編集技術について。フランスの団体SIPARが出版する「私は知りたい」シリーズは、カンボジア人によって作られています。文章は役人が書き、SIPARのスタッフが編集とデザインをします。きれいな仕上がりになっています。本作りの指導をしているのは、フランスからボランティアとして呼んで常駐しているプロの編集者でした。

ASPBがラオスで行う出版は、稚拙な印象がぬぐえない作品も出版してきました。それはラオスに編集者と呼べる人がほとんどいない中で、作家の発掘、育成に取り組んできたためです。外部からの技術でワクに押し込むことへの躊躇があったともいえるかもしれません。とはいえ日本の絵本作家、編集者の協力によって、質は向上しています。

ASPBの活動は、これまでアマチュア主義で続けてきましたが、現在では「プロ化」を進める方針を打ち出しています。ところが、その歩みはのろい。プロ化とは何をどうすることなのか、十分な共有もできず、資金も作れず、進まなかったのです。この1年、東京事務所のメンバーは、様々な研修、研究会に参加し、具体的に何をすればいいのかが、だんだん見えるようになってきました。

現地の自立のための戦略を立て、運営能力を身につけていくこと。その重要性を改めて感じたのが、カンボジアめぐりでした。

事務所の動き

東京事務所	ラオス事務所
<p>■11月</p> <p>3日 運営会議「ラオスの子どもについて知りたいこと」ワークショップ</p> <p>14日 金田北中学校生徒4名来訪</p> <p>17日 草の根市民活動交流集會に出席(赤井)</p> <p>25日 「第2回手づくり紙芝居コンクール」に参加(チャンタソン、森、小川) 「DO-VO企業とNPOのチャリティフリーマーケット」に出展(赤井、風間、清水)</p> <p>■12月</p> <p>7日 長野県川上村・立川上中学校にて講演(チャンタソン)</p> <p>15日 東京都大田区・梅田小学校にて絵本の翻訳貼り(チャンタソン、赤井)</p> <p>■1月</p> <p>13日 運営会議</p> <p>19~20日 サッポロ国際プラザ「NGOとこんちには! NGO屋台村」に出展(工藤、モイ)</p> <p>24日 6社合同社員向け「ボランティア体験講座」講演・絵本の翻訳貼り(チャンタソン、赤井)</p> <p>22~27日 外務省NGO支援事業海外研修(於カンボジア)(森)</p> <p>■2月</p> <p>7日 東京都大田区・池雪小学校にて絵本の翻訳貼り説明(赤井)</p> <p>10日 運営会議</p> <p>13~18日 アセアンNGOネットワーク会議(於インドネシア)(野口)</p>	<p>■11月</p> <p>5日 シェングン中高等学校図書室(HA No.64)開設</p> <p>6日 チョーンベット中高等学校図書室(HA No.63)開設</p> <p>8~9日 ルアンパバーンにてフォローアップセミナー</p> <p>20~21日 サワンナケートにて図書袋配付・フォローアップセミナー</p> <p>22日 ウトウムボン中高等学校図書室(HA No.67)開設</p> <p>23日 ボンサワン中高等学校図書室(HA No.66)開設</p> <p>24日 ケンコック中高等学校図書室(HA No.68)開設</p> <p>■12月</p> <p>1日 青年同盟主催の革命記念日行事に出展</p> <p>18~21日 ルアンパバーン教員養成学校にて読書推進セミナー</p> <p>24~27日 ルアンナムター教員養成学校にて読書推進セミナー</p> <p>■1月</p> <p>15~16日 シェンクワンにてフォローアップセミナー</p> <p>■2月</p> <p>21~27日 紙芝居づくりセミナー(やべみつのりさん、堀田穂さん派遣)</p> <p>26~27日 Canada Fund出版本贈呈式</p> <p>*HA=ハクアーン、ラオス語で愛読の意。 ASPBが支援する学校図書室の愛称です。</p>

お知らせ

●書き損じはがきキャンペーンへのご協力感謝

ハガキ 2,224枚 切手 8,116円分
通信23号でお願いした「書き損じはがきキャンペーン」には、多くの皆様のご協力を頂き、2月末現在ではがき2,224枚および切手8,116円分が集まりました。皆様のご協力ありがとうございました。書き損じはがきは今後とも随時受け付けることにしましたので、どしどしお送り下さい。

●現地出版状況

1月: 「正しく走ろう」(改訂版)
5000冊 出版支援/地球市民財団・連合

2月: 「シナーとユー」(新刊)
5000冊 出版支援/キャノン(株)
「かしこいのはどっち」(改訂版)
5000冊 出版支援/沖電気工業(株)
「わたしをすてないで」(新刊)
5000冊 出版支援/Canada Fund
「孤児と歌を歌うキツネ」(改訂版)
4000冊 出版支援/Canada Fund

ご参加お待ちしております。 興味のある方は、事務局までお問い合わせください。

●ラオスのお正月~「ピーマイパーティ」

ラオスのお正月を東京で。今年もピーマイパーティを開催します。今年ではASPB設立20周年の年でもあり、長めに、盛大に行います。お友だち・お知り合いも誘ってぜひご参加下さい。

日時: 4月21日(日)

12:30~13:30 「走ってころんで歩、歩、歩(ポッポポッポ) ASPB 20年のあゆみ」

14:00~16:00 「ラオスがいっぱい、ピーマイパーティ」
場所: 東京ガス南部支店 大田ビル
予約お申し込みは事務局まで。前日、当日のお料

理、イベント運営のボランティアも募集中です。

●2002年度総会

2002年度の総会を下記日程にて開催致します。
どなたでも参加できます。(事前にご連絡下さい)
5月26日(日) 13:30~
場所: 「ライフコミュニティ西馬込」会議室

●ボランティア活動日

毎週土曜日はボランティア活動日です。(4/13、5/11、6/8を除く)

イベントの報告

●(財)札幌国際プラザ

「NGOとこんにちば！NGO屋台村」

1月19～20日 札幌市生涯学習総合センターちえりあ
札幌のNGOと全国規模で活動しているNGOの活動を紹介するイベントで、延べ2000人の来場者がありました。当会もブースに出展し、会の活動紹介、絵本の翻訳貼り体験やラオスの小物の販売を行いました。

参加しました

サバイディー！工藤です。地元のボランティアも含めて計5名で参加しました。今年も熱心に説明を聞いてくださる方が多く、日本語の絵本にラオス語の翻訳を貼り付ける作業やラオスクイズに挑戦してくださったりと、嬉しいことの連続でした。

地元のNGOやNPOとの交流も持てて、後の活動への意欲を高めて帰ってくることができました。現在、個人レベルではありますが、北海道にASPBを支える拠点を作れないものかと思案中です。北海道の皆さん、一緒に手作りの活動を始めませんか！？(ボランティア・工藤政則)

●6社合同「ボランティア体験講座」

1月24日 三菱商事(株)

毎年、キリンビール、住友商事、三井住友銀行、東京三菱銀行、大和証券グループ、三菱商事の6社の社会貢献担当部署が共催で、社員向けに実施しているイベントです。今年は当会の絵本翻訳貼りに60名の参加者が挑戦、楽しみながらラオス向け絵本60冊が出来上がりました。

●「ラオス文化にふれる会 第1回」

3月10日 駒場留学生会館

当会のイベントなどに協力して下さっているラオス

人留学生たちが初めて企画し、実施したイベントです。参加者は食べて、飲んで、踊って、改めてラオス文化の奥深さを感じた一日でした。

参加しました

「ラオス文化にふれる会」は、留学生のヴィエンシーさんとモイクんの司会でスタート。駐日ラオス大使のご挨拶の後、バリマさんによるラオスの全体的な事と食文化についての紹介があり、ラオス人にとって、いかにハーブが大切かという事が強調されていました。

次に料理の紹介と試食。大切なハーブを使った料理を思う存分堪能しました。特に珍しかったのが「モックイ」。一目見て、ちまきに似ているので、ご飯が入っているのかと思ったら、バナナの葉に入った鶏のレバーでした。ハーブが刺っていて、臭みはありません。その他には「豚挽肉のサラダ」、「竹の子のスープ」、おしるこ風の「小豆とココナツミルク」なども。

続いて、民族衣装のファッションショー。アカ族の女性の衣装は、映画に出てくる「クノー忍者」みたいで格好良い(と思ったのは私だけ?)。ラオトン族の男性の衣装は上半身裸なので、ちょっとびっくりしました。

男女留学生による民族舞踏、男子留学生によるラオスの歌に続き、ラオスの盆踊り(ラムヴォンサマッキー)。私も女子留学生に誘われて踊りの輪の中へ。

第一回とは思えないほど、楽しく、充実した会でした。留学生の皆さん、ご苦労様でした。(ボランティア・塩谷光)

そしてこんな参加のしかたも

1月、ラオスに個人旅行して事務所を訪問

会の活動は私が思っていた以上にラオスに根付いていて、また現地の人々が自ら動いているものでした。先生方へのフォローアップセミナーでは熱心な先生に、CCCでは紙芝居に夢中になる子どもたちに出会い、本・紙芝居・お金がもっと必要だと思いました。子どもたちの笑顔を絶やさないように、今後も活動をつづけていきたいと思います。

(ボランティア・久留雅美)

TV番組企画を募集！

ASPBでは、子どもたちをはじめ、人々が読書に興味を持つための方策として、TV番組の制作を検討しています。

ラオスにもTV局はありますが、多くの方が隣国タイの番組を見ている。「ラオスの番組はニュースばかりで、つまらない」からだそうです。

魅力的な番組を作れないかと、現地関係者と話し合ってきましたが、なかなか良い案がまとまりません。初めにラオス側から出た企画案は、

「クイズ番組」

多種類の本の中から作成された問題に、一般の参加者が解答し、正解数に応じて賞金がもらえるというもの。小学生・中高生・一般と3部門に分け、問題の難易度が上がると、賞金額も上がり、全15問正解となると合計\$75となる(ちなみに公務員の給料は月\$20～30)。

この案に対して、東京事務所から

・多額の賞金は疑問。
・知識量を競い、暗記を推奨するのは、ASPBの活動目的から外れる。

と現地に伝えたところ、

・読書をしたくなるという動機づけになる

・賞金は子どもの教育に使われるようフォローする

と、話し合いは平行線。その次に出てきた案は、

「ドキュメンタリー番組」

読書をしている子、していない子、様々な状況にいる子どもとその親へインタビューをし、読書がいかに大切か訴える。

さて、タイの番組をやめて、この番組を見たいと思うでしょうか？

毎週子どもたちが楽しみにするような番組をラオスで作りたいと、現在模索中です。是非、皆さんのアイデアもお寄せくださいませんか。お待ちしております。